

言葉の類型化による「面白い」概念の類型化

山下 教子

面白いは日常的によく使用されるが、様々な概念が混じっている複合概念である。一体どの様な概念なのか。先行研究の「享楽」と「面白い」がほぼ同じ概念を指すと考え、享楽に関する先行研究を基に面白いとはどの様な概念を含むかについて考察する。

「面白い」全体を把握することを目的として、仮説を立てる。仮説の前提条件として、面白いという概念と「面白い」という語の持つ概念が同じであるということ、言葉を分類することで概念を分類出来るということ、を仮定する。その上で、「面白いに関わる言葉を類似性に基づいて分類すると、現在発見されている面白いの概念と、ひょっとしたら別の新しい概念が発見される」という仮説を立てた。この仮説を検証する為、面白いに関わる言葉を収集し、人間の感じる類似性に基づいて分類する実験を行う。

実験方法として、辞書等から面白いに関わる言葉を網羅的に収集し、被験者を募集して収集した語を類似性に基づいて分類してもらい、一般化する方法をとる。面白いに関わる言葉の収集は、類語辞典をベースに、インターネットやアンケート等、網羅的に行うこととする。分類では、被験者に模造紙、面白いに関わる言葉の書かれた付箋を重ねたもの、油性マジックを渡す。そして、模造紙上で、似ていると感じた付箋を近くに配置させ、作成された付箋群を油性マジックにより実線や点線で囲い、いくつかのグループに分類させる。一般化では、分類基準の異なる被験者毎に分類し、それぞれのグループ毎に平均の類似度行列を作成してクラスタリングする。

その結果、言葉の収集では、計 94 語収集出来た。それらの言葉を大学生 20 名に分類させた。実験参加者は分類の類似性により 2 つのグループに分類された。それぞれの平均をとってクラスタリングすると、それぞれのグループは 9 つのクラスターに分類することが出来た。

グループ 1 とグループ 2 のクラスターを比較して考察したところ、クラスターは 11 個の言葉群の組み合わせが異なっているだけで、ほとんど同じであることが分かった。

グループ 1 とグループ 2 を先行研究で挙げられている概念と対応づけると、ほとんどのクラスターは対応づけられたが、一部のクラスターは対応づけることが出来なかった。そのクラスターは「ありふれた」等の共感に関するクラスター・「怖い・エキサイティングな」等の中性的感情状態のクラスター・「巧妙な」等文章表現に関する評価のクラスターであった。「共感」に関しては重要であるが故にどちらかに分別することが出来なかった。それ以外のクラスターは先行研究の中で触れられていない訳ではないが、重要視はされていない。今後の研究では、これらの要素を「面白い」の中でどう位置付けるかが課題になると思われる。

(指導教員 中山伸一)